

9月は世界小児がん啓発月間である。シンボルカラーの金色で支援を表す取り組みが各地で行われ、山形市の旧県庁・文翔館も9日、ライトアップされた。

本県で小児がん患者らへの支援が本格化したのは2年前からだ。県青年の家(天童市)がコーディネートするボランティアサークル「nicoこえ」が2023年に始めた「山形レモネードスタンドプロジェクト(現山形メークレモネードプロジェクト)」がその中核。小児がんと闘う米国の少女が庭でレモネードを販売し、病院への寄付金を集めたレモネードスタンドを県内でも展開している。

プロジェクトの原点は、小児がんを経験した平田寧々さん(20)＝県立保健医療大2年＝が中学2年生の時、友人と2人で、地元の小さな祭りでレモネードを売ったこと。ただ、直後に新型コロナウイルスの感染が拡大、売店を出せる場がなくなった。平田さんは共に活動してくれる仲間づくりへと発想を転換。折しも青年の家が、やってみたいボランティア活動を募集しており、nicoこえに加わってレモネードスタンドを提案した。

今、活動の輪は全県に広がる。中高生や大学生が各地のイベントに出店。報道などを通して一般の理解は徐々に進み、企業や団体の賛同も増えている。

6日、山形市の「なかまマルシェ」では、市内の菓子店・戸田屋正道(戸田健志社長)と共同開発したレモン味の水ようかんを初めて販売。店頭に立つnicoこえメンバーの声に、多くの人が足を止め、買い求めている。

「まさかここまでになるとは思わなかった」。呼びかけても反応がなく、その場にいるのがつらくなるような時も経験

小児がん患者支援だけでなく

した平田さんは、後輩たちが楽しみに活動する姿に目を細めていた。プロジェクトリーダーとして活動を広げる立場になってみて、中高生の取り組みには大人の支えが不可欠だと実感しているという。

そんな平田さんが「この活動が小さかった頃から一番身近で見守り、支えてくれている」と語るのが、グリーンモール天童商店街(高橋政司会長)だ。清掃ボランティアやモンテディオ山形のアウェーサポーターに将棋駒を贈るおもてなし企画などでnicoこえメンバーとの関わりが深く、プロジェクトの初年度から、商店街の催事「グモ天祭」でレモネードスタンドを開設した。現在は、この祭りで販売するそばの収益も寄付に充てる。

高橋会長は「一方的に支援しているのではない」と話す。加盟店が減りイベント運営の人員も不足する中、レモネードスタンドに関わる若者たちはありがたい存在。地域活性化と一緒に考えてもらおうなど「双方にメリットがある」という。

こうした関係性は個店にも見える。同商店街のフルーツ・スイーツ専門店フルッティア(長瀬昌行社長)は初回から生レモンを絞った特製品を提供。店の定番商品にも加え、売り上げの一部をプロジェクトに寄せる。長瀬社長いわく「商品開発のいいきっかけになった。お客の評価も良く、無理せず支援できている」。

レモネードスタンドが、若者にとってボランティアの入り口になっているとの評価も聞かれるようになった。商店街からは感謝され、最大の目的である小児がんへの理解も進む。お互いに利益のあるウィンウィンの関係になっていけばうれしい」と平田さん。一杯のレモネードでその輪に私たちが加わることができる。